

緊急論点スペシャル

クーデター未遂の背景

エルドアン大統領は、クーデター未遂を政敵の穏健派イスラム組織「ギュレン運動」を支持する一部軍人による反逆行為との見方を示した。かつて自分を支持したギュレン運動は、エルドアン氏の腐敗や汚職の増大につれて袂を分かった。氏は、政治的反対派をギュレン運動と結びつける傾向があり、この点はあまり重視する必要がない。

政治との関係変化  
クーデター未遂の背景を長期的に見れば、軍と政治との関係に大きな変化があったことに気がつく。

トルコ国防軍はこれまで1960、71、80年と3回のクーデターを起している。20世紀のクーデターは、政党政治の混乱による政治と経済の危機に直面して、袋小路を打開するために、ある程度の国民的な理解や支持を背景に行われた。そのシナリオは参謀総長を軸に練り上げられ、軍全体の意思として策定されたものだ。

現在のトルコ共和国は、第1次世界大戦の英雄ケマル・アタチュルクの写真が、大戦敗北後に大統領となって建設した国である。オスマン帝国の宗教的伝統

トルコで15日夜、起きた一部軍部隊によるクーデター未遂は、16日までにほぼ鎮圧された。事件の背景には何があったのか。今後、中東を中心とする情勢にどのような影響を与えるのか。トルコをはじめとする中東研究の2人の専門家に話を聞いた。

「反世俗」「腐敗」への反発

山内昌之氏 明治大特任教授



やまうち・まさゆき 札幌生まれ。北海道大学卒。東京大学客員助教授、東京大学教授を経て、現職。著書に「ラディカル・ヒトラー」(吉野作造賞)、「トルコ革命とソビエト・ロシア1918-1923」など。68歳。

と決別して、中東で初めて政教分離つまり世俗主義を国是として掲げてきた。世俗主義の担い手にして、最後の砦であることを国防軍は自負してきた。

共和では長い間、行政の長である首相と軍トップの参謀総長は事実上同格に扱われてきた。しかしイスラム主義者のエルドアン氏は、選挙と議会の優位を根拠に、人事配置や憲法改正により両者の関係を政治優位に変えることに成功した。



法曹界や学界やジャーナリズムとも結びついた世俗主義者の牙城こそ軍であり、エルドアン氏は軍関係者らの逮捕によって、与党「公正発展党」の長期政権化を図り、自らがアメリカ型やロシア型の大統領になるための障害を除去しようとした。



16日、トルコ・イスタンブールで、反乱勢力からボスポラス大橋を取り返した後、戦車の上に結集する人々 (AFP時事)

不安定な国家「露呈」

確かに、今回の事件は3度のクーデターと同列には論じられない。軍全体が単一の指揮と統制によってクーデターに参画したのではない。軍首脳がエルドアン氏の人事権によって抑えられている体制は揺るがなかったようだ。

現地の報道を見ると、事件は、陸軍の主力第1軍の麾下にある部隊が大佐クラスに率いられて決起した、というところのようだ。

エルドアン政権は腐敗と汚職が常態化し、利権が構造化している。特に農村への利益配分などに対して、世俗主義の信奉者たる大都市中間層の間に、強い不満が蔓延している。所得格差や失業など中間層の不利益

と、今回の佐官級将校の不満が重なる面は否定できない。トルコが予想以上に不安定な国家であることを露呈した結果、イランと並ぶ非アラブの地域大国としての存在感と信頼感は打撃を受けた。イランは今後、スンニ派大国のサウジアラビアとトルコとの関係で政治的に優位に立ち、シリア問題でもロシアと並んで攻勢に転じるだろう。トルコ、サウジのスンニ派諸国の力が弱まる結果として、中東地域の不安定化は増大する。

エルドアン政権が経済成長の成果を元に、バランスのとれた内政と「隣国の問題ゼロ外交」がびったりと組み合わさって堅実な成果

軍を政治利用している。エルドアン氏は、昨年6月総選挙では絶対多数を取ろうとしたが果たせず過半数を割り込んだ。そこで氏は事態打開策として、和解プロセスにあったクルド人勢力に対し、再び戦争を仕掛けた。反クルドの雰囲気

(編集委員 三好範英)